渡辺曜と浮気した話

人体列車

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕には彼女、高海千歌がいるにも関わらず渡辺曜と間違いを犯してしまったんだ。

目次

1話 …… 1
2話 …… 9
3話 …… 14
4話 …… 21
最終話 …… 30

1話

夏の脂っこい日差しが上から降り注ぎ、下からはコンクリートによる都市的な照り返しの光が暑く照り返す中、浦の星女学院のスクールアイドル、Ａｑｏｕｒｓは屋上で練習の真っ最中であった。

汗を垂らしながら、音楽に合わせダンスをする。

終わったら互いに良かった所、悪かった所を指摘しあい、直していく。

高校の青春を送る日々。

その青春のお手伝い役として、僕、春は居た。

今も水筒の中にスポーツドリンクの粉を入れ、水を適量入れたら振り混ぜる。

それを九つ用意する。

タオルもついでに置いておいた所で皆が暑い、暑いと言葉を漏らしながら、水筒を手に取り喉を嚥下させながら飲んでいく。

「春くん、ありがと」

「僕に出来る数少ない事だからね。」

その太陽に照らされ光り輝いている水を拭き取りながら、僕の彼女、高海千歌がすと

んと隣に座った。
　太陽に照らされた彼女の姿はとても眩しい。
「もうとっても暑いよぉ……」
「今日は中々最高気温も高いみたいだしね。ちゃんと水分は取るんだよ？」
「はーい。」
　そして、彼女はくぴりと1口飲む。
　その横顔から僅かに見える白いうなじに、コクリと動く細い喉に少しドキリと胸が高鳴った。
　目を逸らし、みかんがプリントされている彼女のタオルを取って投げる。
「春くん、汗拭いて～」
　身体をだらけさせる彼女をついつい、甘やかしてしまう。
　末っ子だからなのか甘え方が上手いというか狡猾というか。
「自分で拭きな。そのくらいは」
　え～と不満を漏らす彼女
　そして、そういえばと前置きをしてからこう言った。
「ねぇ、春くん。明日練習休みだしさどこか遊びに行かない？」
「明日？別にいいけど。どこ行くの？」

「うーん、沼津の方にお買い物にでも行こうっかなぁ～」
「ショッピングね。了解」
楽しみにしてるよ！と言って彼女は練習へと戻って行った。
その後ろ姿を眺めていると、違う人影がこちらに来ていた。
「千歌ちゃんとお出かけするの？」
「曜……聞いてたのか」
やけにニマニマとした笑みでこちらを見つめる曜。
同じ千歌と幼馴染であるのだが、やけに距離が近い。
今も隣に寄り添う様に腕にしがみついている。
暑苦しいから離せと言ったって彼女は聞かない。
「曜ちゃんがアドバイスしてあげよっか？ファッションとか」
「別に大丈夫」
千歌と付き合うことになって、デートに行く時にファッションについて勉強はしてある。
抜かりはない。
「千歌ちゃんと毎日毎日イチャイチャしちゃってさ。」
「僕の好きな人だからね。」

「ねえ、何処まで行ったの？手を繋ぐ？キス？それともっと進んじゃった？」
「別に曜には関係ないだろ。」
そんなバカ正直に恥ずかしい事を言える訳ない。
「ふ～ん、あ、そうだ。相談したい事あるからこの後ちょっと残ってくれる？」
「それは別に大丈夫だけど……」
千歌の方に目をやる。
腕の高さや動きをあーでもないこうでもないと動かす彼女。
僕には彼女がいる身。
あまり他の女の子との一対一で会うのは浮気を疑われるので避けたい。
千歌は案外嫉妬深いし。
「千歌ちゃんに私から言うから大丈夫。」
そう言うと曜は千歌の方に走って駆け寄り、話し掛け、それを聞いてなのか千歌はぷく～と頬を膨らませていた。
話が終わったのかまた走ってこちらに駆け寄ってきた。
「少しなら。だって。愛されてるね」
「分かった。なら練習が終わった後、教室で。」
「すいません、春さんこちらに来ていただけますか？次のライブについてなのですが

……」

「はーい、今行きます。」

曜にそう待ち合わせを決め、ダイヤさんに呼ばれた為離れようとした時に曜は奇怪とも取れるくらいに、笑顔を浮かべていた。

もう一度見てみると、普通の顔に戻っていた。

あれはなんだったのか。

◆

日もすっかり海に沈みかけ、赤い日差しが窓に差し込み、自分のクラスの教室に向かっていく。

それまでに、話とはなんなのかを考えながら人気のない廊下をコツコツと音を鳴らし歩いていく。

彼女には衣装を任せている。

デザインの事だろうか、それとも布か資金が足りないのか。

扉の取っ手に手をかけガラガラと音を立て、開いていく。

いつもは軽く開く扉がなんとなく重く感じた。

中に入ると机に座り、携帯を弄りながら待っている曜の姿があった。

「それで、話って？」

携帯から目を離し、机から降りて彼女はこちらを見る。
「まずはこれを見て欲しいんだけど……」
携帯に画像か何かを表示して見るように指示をする。
その画像を見ようと彼女には近づいて行き、あと二、三歩くらいの時にぎゅっと手を引っ張られ僕は床へと押し倒された。
次に感じた感覚は唇に甘く柔らかい感覚。
そして、目の前には曜の顔がいっぱいに映し出された。
次に、ニュルりと何かザラザラとした物が口の中に侵入し、口腔内を蠢き歯等を丁寧に舐めとる。
離れる。そんな考えが浮かばない程呆気に取られていた僕は、ただ彼女の蹂躙を受けるしか無かった。
脳が段々甘く蕩けていく様な感覚を覚えた。
離れた時には互いに息が絶え絶えになっていた。
銀色の橋が掛かっている先には彼女の艶めかしく輝く唇。
僕は彼女とキスをしてしまったのだと、今なって気づいた。
僕は声を荒らげた。
「曜!!」

「えへへ、これが春ちゃんのファーストキスだと嬉しいな。ちなみにこれが私のファーストキスだよ」

頬を赤く染め、上目遣いでそう言ってくる曜。

ペロリと唇を舐める様は何とも蠱惑的で、通常ならドキリと胸が揺らぎすぐに惚れてしまいそうなものだが、今はなぜ、キスをしたのかという疑問や千歌への申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「千歌ちゃんは多分こういうのには疎いからどうせまだなんでしょ？きっと手を繋ぐくらい。私の心と身体にいっぱいの気持ち、受け取ってね？」

もう一度顔を近づけて来る。

それを手で制した。

「曜、なんで……」

「千歌ちゃんの物が欲しかった、気になったって言うのもあるけど、一番は貴方を愛してるから。いくら私でもこんなのは好きな人にしかしないよ？」

制服のボタンを二個ほど外し、少しはだけさせる。

水色の下着がそこからは見えていた。

目を逸らそうとしても、彼女の手が無理やりに曜へと視線を戻させる

そのまま僕は手も足も出ないまま、彼女とひとつになった。
しかし、僕も彼女がいると言うのに曜と浮気をし、身体を重ねる
その背徳感を楽しんでいたのは確かであった。

2話

次の日の朝、いつもの様に千歌と一緒に学校に向かうために十千万へ向かう。
「おはよう！春くん！」
満点の笑顔を咲かせ、挨拶をする千歌の顔を見ることは出来なかった。
「春くん……？」
顔を逸らしたのが気になったのか顔を覗き込む様に千歌は尋ねてきた。
「い、いや、少し考え事。今日どこ行こっかなぁって。おはよう、千歌」
「うん！楽しみ！」
そう言って、腕に抱きついてくる。
頭を撫でてやると、気持ちよさそうに目を細めた。
昨日の事を忘れてしまうくらい今は幸せで、このまま昨日の事を忘れてしまいたい。
「おはヨーソロー！」
しかし、いとも容易く崩された
昨日、嫌になってしまうくらい好きになってしまうくらい聞いた彼女の声。
振り返るとアッシュ色の髪を風にたなびかせながら、彼女、渡辺曜は立っていた。

「おはよう、曜ちゃん」
「おはよう、千歌ちゃん。そして、春ちゃんも。」
「あ、ああ。おはよう。」
ドキドキと心臓がうるさいくらいに鼓動を始める。
もし今、曜から昨日の事を千歌に言われたら終わりだ。
襲われたとはいえ、浮気は浮気。
千歌からすると気持ちのいいものではないだろう。
そんな思考の海に落ちていると曜は顔をこちらの耳元に近づけて、囁いた
「昨日は楽しかったね」
それで、思い出してしまうのは一糸まとわぬ彼女の白く輝くしなやかな肢体、快感に喘ぐ声、そしてこちらに与えられた快感。
忘れようとしても脳に、耳にこびりついて離れない。
何とも悲しい男の性(サガ)。
あんな姿を見てしまったら、ついつい意識をしてしまう。
それが、可愛い又は美人な人なら尚更。
僕が千歌を好きという気持ちは決して変わらないが、大きく揺さぶりを掛けるのには十分だった。

「千歌ちゃんには言わないであげるよ。」
そう彼女は耳元で囁く
ぞわりと身体に駆け巡る声
「その代わり……
焦らす様にもったいぶりながら、こう言った。
また付き合ってね。来なかったら……ね？」
何とも楽しそうに、彼女は僕にそう言って立ち去った。
来なかったら、多分その時は千歌に報告される事だろう。
今日の千歌とのデートはその事で頭がいっぱいだった。
＊
あれから曜は、「今すぐ私の家に来て。来なければ千歌ちゃんにバラしちゃおうかな～♪」
と脅し身体を幾度か重ねていた。
そこで彼女が何回も何回も耳元で呟く言葉がある。
それは
「千歌ちゃんから私の物になる気になった？」
優しく背中を撫でながら、頭を撫でながら、それでいて離さないと分かるほどに力を

入れて僕を抱きしめながらよく彼女はそういうのだ。
僕を煽るかのように
「千歌ちゃんと出来ない事、私はなんでもしてあげるよ?こういう事だって貴方の好きな風にしてあげる。千歌ちゃんを捨てて私の物になってよ」
甘い言葉を目の前にぶら下げて誘惑をしてくる。
もう脅されて何回もこんな事をしている僕が言っても説得力は無いけれど
「僕は千歌一筋だ。」
今、こうやってズルズルと続いているこの関係。
強く断れずにまた今日もしてしまう自分の事が嫌いだ。
千歌にバレて嫌われたくない、別れたくない、あの輝きを手離したくないとただの利己的な考えで彼女と交わした秘密事は無し、困った事があったら相談するという付き合い初めて最初に決めた約束事をしたが、それすら守れてないダメな彼氏。
彼女の隣に立つ資格なんてとっくに消えている。
それでも僕は千歌の事が大好きなんだ。
彼女の隣に縋りつきたいんだ。
特有の性の匂いが充満する曜の部屋でスマホで今まで来た通知を確認している僕を曜はつまらなそうに口を尖らせ僕を見つめていた。

そして、不敵に1回笑い彼女はどこか遠くを見ながら
「春くんは私の事好き?」
首を傾げなからそう聞いてくる
「ふ……「もちろん、普通ってのはダメ。好きか嫌いか」……」
普通と言って濁そうとする前に先手を打たれた。
「好きか嫌いかと言えば曜の事は好き」
彼女へのせめてもの反抗として出来るだけ小さく聞こえないように呟いた。
それでも彼女は地獄耳だったようで
「そっか!!春くんは私の事大好きなんだね!勿論、私も愛してる」
満点の笑顔と共に彼女は隔てる物が何一つない布団の中で抱きついてきた。
「千歌ちゃんに負けないよ?私」

3話

今日は曜にも呼ばれていない、千歌と約束もしてない完全にフリーな日。
家にいても嫌な予感しかしなかった為、僕は今、遠くの本屋へ出かけた。
ここなら千歌も曜も来ないだろう。
曜の事も千歌に対する申し訳なさ、言えない自分のもどかしさを一時的にでも忘れてしまいたかったから。
とは言ってもお目当ての本がある訳でも無く、ただタイトルや帯から面白そうな本を手に取り、立ち読みをするだけなのだが。
それだけでも僕は気持ち大分楽になったような気がした。
気に入った本を3冊ほど見繕い、携帯を開く。
「12時40分か……げ、電池少なくなってる。」
丁度お昼くらい。昼食を取るにはいい時間だろう。
あと充電もしたい。最近は減るのが早い気がする。そろそろ買い替え時なのだろう。
近くにあったカフェで昼食を取ろうかと僕はお店に入ろうとした。
すると後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「春くん!!」
後ろからぎゅっと抱き締められる。
背中から香る柑橘類の様な甘酸っぱい匂い、脳が蕩けそうになるほどの甘い声。
僕の彼女、高海千歌。
「千歌?」
「やっぱり春くん!奇遇だねぇ〜」
一段と強くぎゅっと抱きめしる。
「千歌、どうしてここに?」
内浦からは距離があるし、沼津からも大分距離がある。
だから、曜と千歌から離れて考えようとこの場所を選んだのだか。
「志満ねえにお使い頼まれちゃって……ここで売ってるみかんが美味しいから家は買いに来るんだよ!今、そのお店のトラックで家まで運んで貰ってるんだ」
高海家には絶えずみかんが置いてある。
旅館へ来たお客様に出す用、あと自分たち用として重宝しているのだろう。
あまり違いが分からない僕が食べても美味しいと感じる程の物。
少し家からは遠いが、今度買ってみるものいいかもしれない。
「春くんは何してるの?」

「いや、僕はちょっと本を買いに来ただけ。たまには遠出をして見るのもいいんじゃないかと思って。」
「なら、千歌も誘ってくれれば良かったのに……」
ぷくーと膨らませた千歌の頬を突くと穴の空いたボールの様にぷしゅーと萎んでいく。
「まぁ、結局こうしてあったんだからいいじゃん。」
「なら、許してあげよう！あ、家に美味しいみかんジュースあるんだけど一緒に飲もうよ！」
彼女は僕の手を引っ張り駆けていく。
千歌に引っ張られながら僕は、雲に隠された太陽が浮かぶ空を見た。
雨……降るのかな。

◆

十千万へと戻ってきた僕達。
千歌は冷蔵庫からみかんジュースを取り、自分の部屋へと元気よく駆けていった。
そして、僕は美渡さんに捕まっていた。
「お、春。」
「こんにちは、美渡さん。」

「今日も何処か一緒に千歌と遊びに行ってたのか？」
「あ、いえ、ただ僕1人で出掛けてたんですけど、志満さんからお使い頼まれてみかんを買いに来たって聞いたんですけど……」
「あれ？そんな事言ってないはずだぞ。千歌からは春と出かけるって聞いた。」
「え？」
「もしかして、何か私に内緒で美味しい物で買うために嘘ついたんじゃないだろうな、千歌……」
「そんな事……あるかも。」
千歌なら、美渡さんに食べられたくないと内緒で買うくらいしそう。
みかんケーキみたいなの。
美渡さんの食べ物に対する勘は鋭いのだ。
「春くーん!!早く来てよ!!」
「今行くよ。」
「千歌が買ってきたやつを見つけるとするか」
「食べないでくださいね、そしたら、絶対千歌拗ねますし、拗ねたら機嫌直すの大変なんですから。」
そう美渡さんに言い、階段を上がり千歌の部屋へと入る。

「もう、遅いよぉ～」
「ごめん、ごめん。」
彼女の隣へと腰掛ける。
すると、足の間の隙間に彼女は移動し挟まる様に座った。
「えへへ～千歌の特等席～」
にへらと笑う彼女を見て、くすりと僕は笑って彼女の髪を優しく撫でた。
さらりと流れる彼女の美しい太陽の様な輝きを持つ髪。手で梳いてあげると、ふわりと彼女の甘い香りが漂った。
その後はくだらない話をした。
帰る時にいつもする様な会話を日が落ちるまで。

◆

外はもう周りを赤く優しく染めあげ、幻想的な風景を作り上げている。
そろそろ帰ろうかと、立ち上がるとちょこんと服の裾を掴まれていた。
掴んでいたのは勿論、千歌。
「どうしたの？」
優しく問いかける。
「春くん、私の事……好き？」

不安げな瞳を向けながらそう問いかけてくる。
「そりゃあ、勿論好きだよ。」
「えへへ～私も愛してる。」
「僕も大好きだよ。千歌」
ぎゅっと千歌を抱きしめて十千万を出た。
出た後に美渡さんと千歌の言い争う声が聞こえた。
千歌、内緒でお菓子食べようとしたんだな……
「ねぇ、面白い情報あるんだけど聞かない？」
出て直ぐにあまり会いたくない人に出会った。
「どうしてここにいるんだ……曜。」
「千歌ちゃん家にいるだろうと思ってずっと見張ってたんだ。そしたら案の定って感じ。」
「ストーカーしてたのか……」
「ただ見張ってただけだよ。ま、それはいいんだけど取っておきの情報があるんだけど、聞かない？」
「一体どんな情報だ？」
「千歌ちゃんの君に秘密にして、君にやってる事があるんだよ。聞きたい？」

僕はぐっと唾を飲んだ。
彼女はただ微笑んだ。

4話

結局あの後誘われる様に僕は曜に着いてきた。
カフェを提案したのだが、一蹴されて結局、曜の家。
バスの中で曜は僕の腕にしがみつき、抱きしめ頭を預け揺られていた。
えへへと楽しそうに笑う彼女を無為に振りほどく程が出来なかった。
やはり、僕は中々のクズで甘いのかもしれない。
その後部屋へと通された僕は、すっかり自分の場所かのように何回も来ている曜の部屋を手持ち無沙汰から見回した。
そこには女の子らしく可愛いぬいぐるみ等が置いてある。
僕も千歌からぬいぐるみ貰ったなぁ。
と感傷に浸っていると飲み物をお盆に乗せた曜が扉を開けて戻ってくる。
そして僕はその持ってきてくれたジュースを1口飲み、切り出した
「それじゃあ、話そうか。」
「もう本題に入るの？せっかく2人きりなんだから……」
曜は人差し指で僕の胸を優しくなぞり、いつもの元気な曜とは似合わぬ大人の色香を

纏いながら
「しちゃう？」
　耳元で囁く。ゾワッとくるものがあるが、表情は崩さない様にして、指を掴んで離させた。
「今日はそんな事しに来た訳じゃない。」
「千歌ちゃんから私の物になる気になった？」
「だから、僕は……」
　相変わらずに人の話を聞かない。
「千歌ちゃんの事が好き、だからでしょ？でも、もし千歌ちゃんが貴方の事を盗聴とか盗撮してたとしたら？」
　僕は自分の耳を疑った。
　千歌が僕の事を盗聴？
　信じられない。
「心当たりない？例えば何も言わずに遠くに言ったのにばったりと会った、とか。」
　僕は振り返る様に考え込む。
　最近だと、本屋に行った時か。
　いや、でも、あれは千歌が内緒でお菓子買いに言った訳で……

「心当たりあるんだね。そう、千歌ちゃんは貴方に発信機盗聴器を付けて監視してるの。」
「なんでそうだと言いきれる。」
動揺を隠せずに絞り出すように返す。
「やっぱり幼馴染だからさ分かるんだよ。千歌ちゃんと私は似ている。目的の為なら手段は選ばないし、好きな人は管理したい。私と千歌ちゃんの違いはただ貴方の恋人かそうじゃないか。そして、貴方とシちゃったかどうか。私の方が1歩先だね。勿論、春ちゃんの事も私はいっぱい分かるよ。好きなタイプ、貴方の弱い所、誘いを断りきれなくて受けちゃう優しさ。こんな風になっても私の事を大切に思ってくれる甘さ。」
ぎゅっと僕を抱きしめた。
「ね?そうなんでしょ?千歌ちゃん。」
後ろの扉に向けてまるでそこにいるかのように喋りかける曜。
「入ってきてもいいよ。」
そう言うと後ろの扉からガチャとドアノブを回す音が聞こえた。
後ろを振り向くな。そう言っている気がする。
頭が痛い。もう振り向いたら元に戻れないぞと警告をするかのように。
しかし、確認もしたい。嘘だと思いたい

好奇心に駆られゆっくりと後ろを振り向くとそこには千歌がいた。
「もう、酷いよ曜ちゃん！バラしちゃうなんて!!」
「千歌……？」
「曜ちゃんは早く春くんから離れてね。私の春くんだから。」
「えぇー、やだよ。私が春ちゃんと先にシたんだから私が彼女でしょ。ね？春ちゃん。」
誰かに問われた様だが、そんな事は僕には聞こえてすら無かった。
茫然自失。僕はまさしくそんな状態だった。
目は焦点が定まらず視界は激しく動く。
頭は理解をしたくないと拒み真っ白に。
目の前の物すら霞んで見えずただいるだけ。
「ち……か……」
やっと絞り出して出した声は掠れ、震えている。声になっているかどうかも怪しいくらいの細い声。
「えへへ、彼女だもん。ちゃんと変な虫が付かないように監視するのも彼女の役目だもんね！」
否定をせずにむしろ肯定の意を示し、当たり前かのように話す彼女からはいつもの明るさ、優しさ、温かさなんてものは一切感じることが出来ない。

ただ執着心独占欲が目に黒く現れている。
「だから、曜ちゃんとシちゃってるの聞いてて耐えるの大変だったんだよ～！いつか春くんに言って止めさせようと耐えた千歌偉いと思わない!?褒めて!!」
頭を差し出してくる千歌を撫でることもせずにただ僕はその頭を見つめていた。
「ほら、千歌ちゃんはそんな事をしてたんだよ?それに比べて私は貴方を監視するわけでも盗聴をする訳でもなく貴方を自由にしてる。春ちゃんの願いは何でも私が叶えてあげる。」
再びぎゅっと抱きしめられる。
「私の、曜ちゃんの物になっちゃいな。千歌ちゃん何か捨ててさ。」
僕の中で何かがグラッと揺らいだ
「曜ちゃん離れてよ!そういうのは千歌の役目なの!」
「え～でも千歌ちゃんは盗聴したりするんでしょ～そんな人と付き合うのは怖いよ。私はそんな事はしないもん。怖いね～春ちゃん」
「人の彼氏を寝とる様な事をしてる人には言われたくないな～。もし春くんと付き合っても他の人と浮気するんじゃないの～?」
「しないよぉ。私、一途だし。」
「信用性がないよね。脅してシちゃったのも良くないと思うし。」

「え～？でも最後は春ちゃん結構乗り気みたいだったけど？」
「聴いたけどそんな事無かったけどなぁ～」
いつもの様な感じで会話をしている2人だが、後ろに鋭く尖ったナイフを隠し、傷つけ合う光景を僕はただ見ている事しか出来なかった。
そして、段々頭の整理がついて来た僕は、決心が付いた。これを終わりにする決心、その為に冷たく突き放す様に言った。
「僕、もう帰るね。曜、もう千歌が知っているならこの関係は終わりだ。やめよう。もう君にはあまり近寄らないことにするよ。」
曜は大きく目を見開き、その瞳を震わせ始めた。
「いや……いや……いやぁ!!」
涙で顔が崩れるのも厭わずに大きな声を上げ泣く曜。
「そして千歌、話があるんだ。」
そう言って僕は泣き叫ぶ曜を横目に家を出た。
クズは、クズなりにこれには決着を付けないといけないのだから。

◆

そして、千歌と僕の家に戻った。
千歌は曜との関係が消えて嬉しいのか笑顔で座っている。

「それで、春くん話って何？」
　僕は、持ってきたお茶で十分に口を湿らせ、切り出した。
「僕達別れよう。」
「え……？」
　理解が出来ない様子の千歌。
　そして、だんだん分かってきたのか目が潤み始め、ぽつりと床に一滴、二滴と滴り落ちる。
「嫌だよ！いやだ！絶対にやだ！」
「僕は、千歌の事はまだ好きだよ。あんなことされてても僕は好きだ。でも……僕はクズだからさ。君の隣に立つ資格は無いんだ。」
「千歌の事……まだ好きなら別れる必要ないじゃん！曜ちゃんとあんな事をして気に病んでるなら私も盗聴盗撮してたもん…！一緒だもん！」
「ごめんね、これが僕なりの決着の付け方なんだ。」
　僕は2人から逃げるという結論を出した。
　もっといい方法があるのかもしれない。2人を泣かせること無く、笑いあって仲良く過ごせる方法。
　でも、僕にはこれがお似合いだと思った。

２人を泣かせて僕だけ逃げて。そんな自分勝手で最低の方法。
これ以上彼女達の輝きを僕のせいで曇らせる訳にはいかない。
もっとＡｑｏｕｒｓとして輝いていて欲しい。
「なら、最後に彼女としてお願いを一つだけしてもいい？」
涙ぐんだ目を擦りながら今までの様に話しかけてくる。
千歌の赤く腫れた目が僕には深く突き刺さる。
「うん、いいよ。」
「最後に私にキス、して。」
「それなら。」
優しく千歌の唇にキスをした。
甘くそして幸せな別れのキス
そして、離れようとした。
「ごめんね。やっぱりキスじゃ満足出来ない。」
そのまま押し倒される。
その後は、僕はただ人形の様にいるだけでされるがままであった。
一方的に蹂躙されるだけの行為。
身体は何故か動かない。恐怖からか、驚きからか。それとも……僕も望んでいて拒め

なかったのか。
ずっと彼女が
「ごめんね。ごめんね」
と謝りながらしていたのも原因かもしれない。

最終話

「きみだあれ？」
僕は人見知りな性格の子供だった。
初めてここ、内浦に来た時に友達がいなくて心寂しかったのを覚えている。
何かの帰りに海岸線、十千万の近くを歩いていた時にそう僕は声を掛けられた。
最初は自分だと思わずに立ち去ろうとしたら、つんつんと肩をつつかれてそこでその言葉は僕に向けられているのだと気づいた。
後ろを見ると、橙色のショートカットの女の子とグレーのボブカットの女の子が二人僕の事を見ていた。
「ぼくは、はる。」
「へぇ、はるくんっていうんだ！わたしは、たかみちか！よんさい！」
「わたしは、わたなべようであります！！ちかちゃんとおなじく、よんさいだよ！」
「きみはなんさいなの？」
「ぼくもよんさい」
「じゃあ、ちかたち、おないどしだね！」

「わたしたちといっしょにあそぼう?」
そのまま僕の手を引っ張って海へ駆け出していく2人の姿を見てとても眩しいと思った。
そして、僕は2人のその明るさに沢山救われた。
僕はその時から変わろうと思ったんだ。

僕は夢を見ていた。
二人と出会った時の夢を

◆

初デートのショッピングモールで
「次はあそこ!!」
「千歌、手を引っ張るなよ、転んじゃうだろ」
「あはは……つい楽しくて……」
「いつも元気だけど今日はいつにも増して元気だね。何かいい事あったの?」
「いい事……うん!春くんと2人でデート出来てるから!前みたいにお友達としてじゃなくて春君の彼女として出来るのが嬉しくて……ね。」
展望台で

「わぁ、夕焼け綺麗……！」
「本当だ。綺麗だね。」
僕は夕焼けではなくてその夕焼けに照らされる千歌の横顔を見ていた。
赤く優しく照らしている光が千歌をより一層美しく、そして可愛くしていた。
「もう、千歌じゃなくてこの綺麗な夕焼けを見てよ！嬉しいけど。」
「ごめんごめん、」
「ねぇ、春くん目をつぶって？」
僕は目を閉じた。
「んっ」
すると頬に温かく柔らかい感触があった。
ゆっくりと目を開けると顔を綺麗な夕焼け以上に赤くした千歌がいた。
「まだ恥ずかしいから口じゃなくてほっぺだけど……えへへ、キスしちゃった。」

僕は夢を見ていた。
千歌と幸せに過ごしていた夢を
◆
「今日はどこに行くのでありますか？」

「今日は、水族館でも行こうか。」
「水族館……！いいね！」
「腕に抱きつくなよ……」
「え～別にいいじゃん。何かぎゅーとしてると安心して心がポカポカするよ？」
「はいはい。」
「春ちゃん、好き」
「そうかよ。」
「顔赤くなってる～！可愛い、春ちゃん。水族館に向かって全速前進ヨーソロー！ほら、春ちゃんも一緒に」

僕は夢を見ていた。
曜と楽しく、そして曜を段々好きになっていく夢を。

◆

「春く～ん」
「どうした？千歌」
「呼んだだけ～～あ、春くんの膝の上頂き～！」
「千歌ちゃんずるいよ！そこは私の特等席！」

「残念だったね、曜ちゃん、早いもん勝ちだもーん」
「じゃ、私は春ちゃんをぎゅっとする！」

僕は夢を見ていた。
曜と千歌と三人で楽しく幸せに暮らしている夢を

これは有り得たかもしれない世界。
でも存在しなかった世界。
そして、僕が望んだ、僕が作り出した逃げる為の妄想のセカイ。

◆

そして、僕は目を覚ました。
カーテンは締め切っていて、仄暗い闇が部屋を包んでいた。
あれからと言うもの僕はずっと家に篭っていた。
何をするでもなくただ1日ずっと、ぼっーとしながら過ごす日々。
僕には千歌に対する驚きや、二人にされた事が後を引いている。
あの彼女達の支配欲、独占欲、執着心に満ちた漆黒のそこの知れない程、闇に溢れている目はもう見たくない。ただただ怖い。

Ａｑｏｕｒｓの練習も参加していない。
ダイヤさんに「千歌と曜と喧嘩して会いずらいから仲直りするまで行かない」と無理やりながら理由を付け説明した。
ダイヤさんは優しく、「早く仲直りして戻ってくる事を私は待ってますわ」と言ってくれた。
何となく感ずいてはいるのかもしれない。
でも深く触れずに流してくれたその優しさが嬉しかった。
学校にも行っていない。
あれからというもの二人が怖い。
千歌と別れてから携帯や貰ったぬいぐるみに仕込まれていた盗聴器やカメラは破壊した。
ひたすら彼女たちに怯え暮らしていた。
信じていた彼女に、友達に。
別れた、関係を切ったのはいいが、まだ幻影を僕は恐れている。
いっそ海に身でも投げようか。
いや、そこまでの覚悟はない。死ぬのは怖い。
そうだ、どこか遠くに行ってしまおうか。

Ａｑｏｕｒｓの人達が誰も知らない様な所。
自分から振った女性に恐怖し、何処かに更に逃げようとしている。
なんとも自分は間抜けでクズだなと、ふっと自分を嘲笑した。
そうと決まればある程度の準備をしなくてはならない。
悪いけど、鞠莉さん達にも連絡はしないでおこう。そこからバレそうだ。
何処か遠くに行く。そう考えると僕は、少し心が軽くなった気がした。
僕はリュックに荷物を詰めながら準備の手を早めた

◆

朝早くに僕は荷物をまとめたリュックを背負い、何処か遠くに、二人から逃げてしまおうと家を出た。
ジリジリと焼くように照りつける夏の暑さも朝だと和らいで涼しく何とも過ごしやすい。
ここから沼津駅に行って電車に乗って何処か目的は無いけれど、離れられればそれでいい。
「へぇ、私達置いてどこに行くの？」
振り向くな、これは幻聴だ。
いるはずがない、悟られるはずがない。

彼女達の恐怖を植え付けられたから僕の耳は幻聴が聞こえているんだ。
「ねぇ、聞こえてるんでしょ？春くん。」
「春ちゃんこっち向いて欲しいな。」
背中がぞわりとした。身体を貫かんとする程に僕に向いている強い視線。
それも二つ。僕の今最も恐れている数と一緒。
僕は、ゆっくりとその幻聴に従って振り向いてしまった。
そこにはいるはずもない、渡辺曜、高海千歌がいる。
僕の恐怖の対象。
寝ぼけているのかと目をこすっても変わらなかった。
「どこに行くの？私達も連れて行って欲しいな。」
曜が、ぎゅっと僕の隣に寄ってきて腕に逃がさないとばかりに抱きつく。
「春くんは、何をしようとしてたの？千歌に教えてほしいなあ。」
射殺す位の視線を僕の体に突き刺す。
怒りその他にも言い表せないくらい多くの感情が2人の目に宿っていた。
そして、曜が抱きしめている腕とは逆の方に抱き着くとそれらは消え、犬が飼い主に甘えるように顔を腕に擦り付けた。
「ただの散歩しに行くだけだよ。気分転換になるかなって」

「そんな大荷物を持って？」
曜は僕の後ろに隠していた荷物を見ながらそうすぐさま答えた。
誤魔化せない……か。
嘘を言っても直ぐにバレる。千歌はずっと一緒に居たから癖なんかもバレてるだろうし。
圧に耐えきれずに後ずさるとそれに伴って2人は1歩前に詰め寄る。
「実は、春くんに報告があるんだ」
段々と僕は後ずさり、玄関のドアまで達した時、曜は笑顔と共にそう言った。
報告……？僕が行ってない間に学校であった変化だろうか、それとも……また別の
でも、何か嫌な予感がする。
暑くもないのにたらりと一筋の汗が流れた。
「春ちゃん実はね、私達、春ちゃんとの赤ちゃんが出来たんだ」
そう言って2人は愛おしそうにお腹を優しく撫でた。
子供……？
理解したくなくてもお腹を撫でながら言う二人の姿から嫌でも理解してしまう。
「春くんはそんな春くんと私達の子供がいるのに私達を置いていくの？」

「春ちゃんは優しいもんね。私達と可愛い子供を捨てて何処か行こうとしないもんね」
玄関まで僕は後ろに下がり座り込んだ。
すると、曜と千歌はこちらに近づいてきて、カチャリと音を聞いた時に僕は籠に囚われた鳥の様な錯覚を覚えた。
そんな籠の外で2人は怪しげな笑みを浮かべて、楽しそうに笑っていて。
外では雲が2つ昇り始めた太陽をゆっくりと隠し始めていた。
「春ちゃん、子供の名前、一緒に考えないとね」
「えへへ、春くんずっっっと一緒だよ？」
僕は鳥籠に囚われ翼をもがれた鳥。
この鳥籠から出る事も羽ばたく事も叶わない。